

人生ひとくぎり

久保美子

父が旧満州国官吏でしたので、私は奉天（瀋陽）で生まれました。敗戦の少し前、小学一年のとき、父を残し母と兄弟で両親の郷里茨城県に引き揚げてまいりました。戦後、父はシベリアに抑留され、一時は処刑されたとの報も入り、悲嘆のどん底に落ちましたが、うまく収容所を脱け出すことができたらしく、何度も死線をこえて無事帰国してくれました。

引き揚げ後の生活は文字通り茨の道で、辛酸の日々が続きました。小学時代、始めは村の分教場へ、後に本校へ通いましたが、本校までは片道四キロもある野良道でした。その頃、長兄の旧制中学の親友だった久保が私の家をしばしば訪れ、慣れぬ農業を始めた両親を、兄たちと一緒に手伝ってくれたりしておりました。それは、私たちにとっても心強いことでした。田植えや稲刈りなども一緒にやっておりました。筑波山が大きくそびえてみえる田圃の畦道にお茶や握り飯を私が運び、皆と一緒に食べたことも遠い思い出です。

やがて久保も兄二人も東京の大学へ。私も水戸の大学に進学したりして、互いに音信が途絶えておりましたが、長兄が不幸にも在学中事故で急逝したあと、久し振りに帰郷した久保が墓参に来てくれ、わが家との交流が復活いたしました。母はまるで自分の息子が帰ってきたように喜んでおりました。このとき、私はすでに、かつて久保が学んだことのある地元の小学校で教員をしておりました。

父は職業柄、またシベリア抑留の体験から、すっかり革新嫌いになっておりましたが、久保のことはそんなこととは関係なく信頼していたようです。特に母は早くから私の伴侶として久保を心に描いていたようでした。結婚以前に久保は無党派になっておりましたが、私も余り思想・信条にこだわる気持ちはなく、兄たちとの交友ぶりから信頼できる人物との印象を持つておりました。その後長く一緒に暮らすようになりましたが、この印象は当たっていたように思います。田舎育ちの土臭さ、世渡り下手、昭和一ケタ特有の遊び下手は変わりませんでした。農民のような忍耐力と実直さは、三十年この方一貫していたように思います。

今にして思えば、その他のことは何も問わず、ただ人間性だけを頼りに私を久保に喜んで託してくれた両親に私は心から感謝したいと思っています。

もちろん、人間的ということは、いろいろな弱さを併せ持っているということ、久保もまた例外ではありません。情に流されて苦しむことも多々ありました。特に子育ての面では——私も同じですが——甘さが目立っておりました。その子供たちも早くも私が結婚したときの年齢をこえ始めました。半生をふり返ってみて、私にとりましても「はるかなる青春」の想いで一杯です。

この詩歌集が久保にとって人生ひとくぎりとなり、気持ちを一新して後半生を元気に生き抜く契機になって欲しいと願っています。
